

2025年2月期第2四半期 決算説明会

概要

企業名：東宝株式会社

証券コード：9602

イベント名：2025年2月期第2四半期 決算説明会

日程：2024年10月16日（水）

時間：15:00 – 15:59（合計：59分、登壇：37分、質疑応答：22分）

開催：インターネット配信

登壇者：代表取締役社長 松岡 宏泰

2025年2月期 第2四半期(中間期) 営業概況

	2024年2月期 (2023年3月～8月)	2025年2月期 (2024年3月～8月)	前年同期差	増減率
営業収入	139,642百万円	163,681百万円	24,038百万円	17.2% ↑
営業利益	30,752百万円	40,915百万円	10,163百万円	33.0% ↑
経常利益	32,881百万円	39,781百万円	6,900百万円	21.0% ↑
親会社株主に帰属する 中間純利益	21,751百万円	26,485百万円	4,733百万円	21.8% ↑

松岡：社長の松岡でございます。本日はご多忙のところ、当社のオンライン決算説明会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

早速ですが、昨日発表いたしました第2四半期の決算概要について、ご説明申し上げます。

当中間期の営業収入は1,636億円、営業利益は409億円、経常利益は397億円、親会社株主に帰属する中間純利益は264億円となり、前期比で大幅な増収増益となりました。

中間期としては営業収入、営業利益、経常利益、純利益の各段階で、歴代最高を記録することができました。

2025年2月期 第2四半期(中間期) 営業概況

【「TOHO VISION 2032 東宝グループ 経営戦略」について】

2022年4月に創立100周年に向けた「長期ビジョン 2032」と3カ年の具体的な施策である「中期経営計画 2025」から構成される「TOHO VISION 2032 東宝グループ 経営戦略」を策定しており、持続的な成長と中長期的な企業価値向上に向けて取り組みを進めております。

前期(2024年2月期)は、「中期経営計画 2025」で掲げた数値目標である「営業利益の最高益更新」を2年目で実現、及び「ROE(自己資本利益率)目標8%以上」を2年連続で達成しました。

【第2四半期(中間期)決算の概況】

映画営業事業において、第1四半期からの続映作品で、興行収入150億円を超えた「名探偵コナン 100万ドルの五稜星(みちしるべ)」のほか、「キングダム 大將軍の帰還」「僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ユアネクスト」「ラストマイル」等の大ヒットにより、増収増益。

映画興行事業において、上記の当社配給作品の高稼働に加え、「インサイド・ヘッド2」等の大ヒットもあったものの、豊富なヒット作があった前年同期に及ばず、減収減益。

映像事業において、「僕のヒーローアカデミア」「ハイキュー!!」「呪術廻戦」「怪獣8号」等のTOHO animation作品が、劇場公開、動画配信、商品化権、パッケージ販売等の多面的展開により好調に推移した結果、大幅な増収増益となり全体の業績を牽引。

映画事業全体では、上記の要因により、増収増益。

演劇事業では、帝国劇場「ムーラン・ルージュ! ザ・ミュージカル」や、シアタークリエ「ナビレラ -それでも蝶は舞う-」等が好調に推移し増収となったものの、公演経費の増加等もあり、減益。

不動産事業では、不動産賃貸事業において、前期より子会社となった㈱東京楽天地の業績が貢献したことに加え、昨年2月竣工の「東宝日比谷プロムナードビル」をはじめとする当社保有物件が好調に推移し増収となったものの、大規模修繕等に伴う費用の増加があったため、減益。

上記の結果、当第2四半期(中間期)の営業収入、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する中間純利益が増収増益となり、各段階で歴代最高を記録。

当社の「中期経営計画 2025」については、前期に営業利益の最高益 528 億円の更新を実現することができ、ROE 目標 8% 以上も 2 年連続で達成することができました。

中期経営計画の最終年度となる今期も、ここまで順調に成績を伸ばしており、より高い目標を達成できるよう努めてまいります。

セグメント別業績一覧

	営業収入			営業利益		
	2024年2月期 (2023年3月~8月)	2025年2月期 (2024年3月~8月)	増減率	2024年2月期 (2023年3月~8月)	2025年2月期 (2024年3月~8月)	増減率
①映画事業	94,872	113,853	20.0% ↗	22,831	33,667	47.5% ↗
映画営業	24,474	36,047	47.3% ↗	9,610	16,234	68.9% ↗
映画興行	44,516	41,126	-7.6% ↘	8,114	6,860	-15.5% ↘
映像事業	25,880	36,679	41.7% ↗	5,106	10,572	107.1% ↗
②演劇事業	9,707	9,974	2.8% ↗	1,264	1,241	-1.9% ↘
③不動産事業	34,463	39,198	13.7% ↗	9,250	8,844	-4.4% ↘
不動産賃貸	14,530	18,842	29.7% ↗	6,031	5,716	-5.2% ↘
道路事業	14,690	14,948	1.8% ↗	2,641	2,523	-4.5% ↘
不動産保守・管理	5,242	5,407	3.2% ↗	576	604	4.8% ↗
④その他事業	599	653	9.1% ↗	114	91	-19.6% ↘

(単位:百万円)

3

TOHO

次に、セグメント別業績をご説明します。

映画事業は、営業収入 1,138 億円、前期比 20% 増。営業利益 336 億円、前期比 47.5% 増。演劇事業は、営業収入 99 億円、前期比 2.8% 増。営業利益 12 億円、前期比 1.9% 減。不動産事業は、営業収入 391 億円、前期比 13.7% 増。営業利益 88 億円、前期比 4.4% 減となりました。

映画事業は大幅増収・増益、演劇事業と不動産事業は増収ながら、若干の減益となっています。

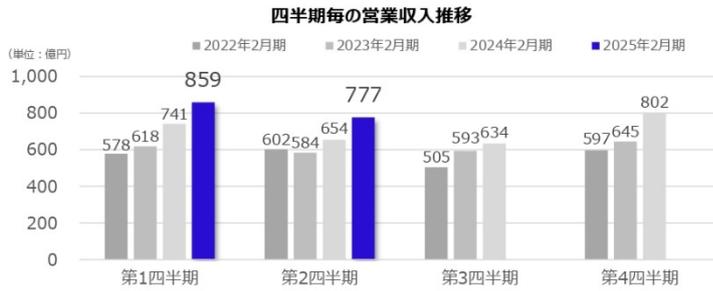
セグメント別業績(四半期別)

	営業収入		営業利益	
	第1四半期 (2024年3月~5月)	第2四半期 (2024年6月~8月)	第1四半期 (2024年3月~5月)	第2四半期 (2024年6月~8月)
①映画事業	60,002	53,851	20,098	13,569
映画営業	19,730	16,317	9,873	6,360
映画興行	21,372	19,754	3,805	3,054
映像事業	18,899	17,779	6,418	4,153
②演劇事業	5,246	4,728	1,009	231
③不動産事業	20,390	18,808	4,739	4,104
不動産賃貸	9,419	9,422	2,835	2,880
道路事業	8,062	6,885	1,551	971
不動産保守・管理	2,908	2,499	352	252
④その他事業	337	316	48	43

(単位:百万円)

当四半期の3カ月間の数値は、ご覧のとおりです。

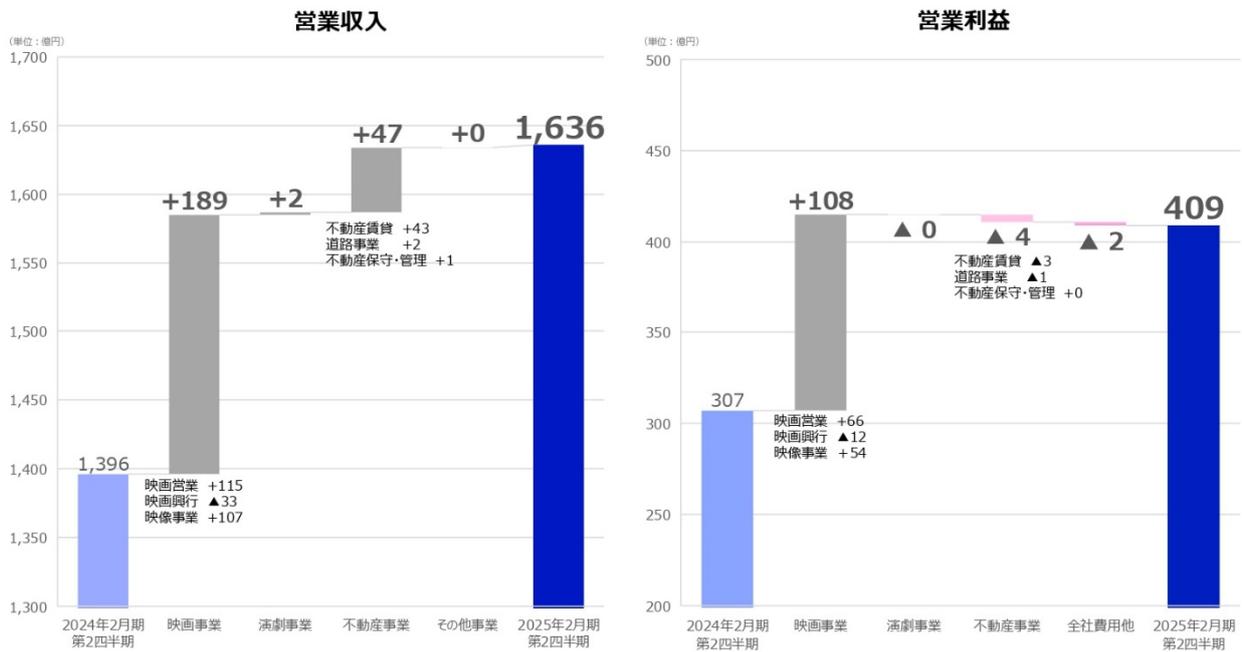
四半期業績推移



四半期ごとの営業収入と営業利益の推移です。

第2四半期においても、高いレベルが続いております。

営業収入・営業利益増減状況



営業収入と営業利益の、前期との増減状況を示したグラフになります。

ご覧のとおり、特に映画事業の増収・増益が大きかったことがご理解いただけると思います。

映画事業における主要作品の稼働状況

当第2四半期(6～8月)において、下記作品が劇場公開に加え、各セグメントで業績に貢献

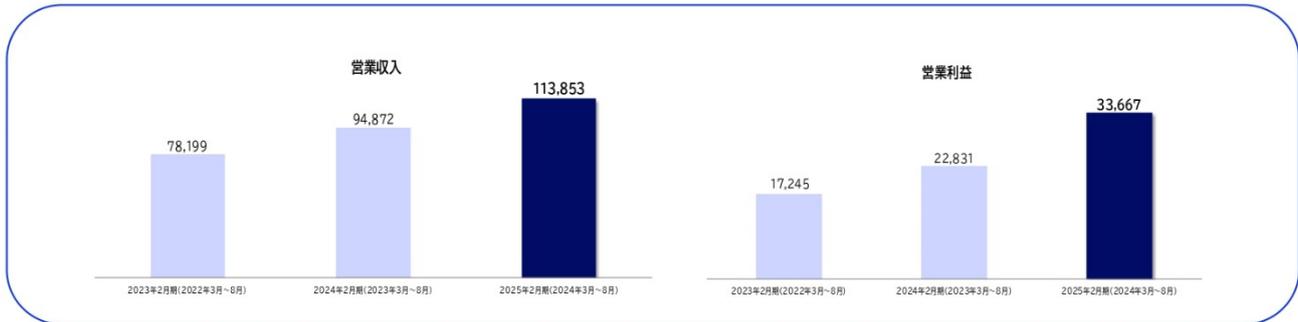
	2023年11月3日公開 「ゴジラ-1.0」	2月16日公開 「劇場版ハイキュー!! ゴミ捨て場の決戦」	7月12日公開 「キングダム 大將軍の帰還」	8月2日公開 「僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ユアネクスト」
	国内興行収入 76億円 (北米興収 約85億円)	興行収入 115.5億円	興行収入 78.5億円	興行収入 34.6億円
	当社単独製作	製作委員会方式(幹事)	製作委員会方式	製作委員会方式(幹事)
映画営業事業	製作出資収入 配信(海外) 番組販売	配給収入(国内)	配給収入(国内)	配給収入(国内)
映画興行事業	—	興行収入	興行収入	興行収入
映像事業	—	製作出資収入 キャラクターグッズ キャラクターライセンス	劇場商品・パンフレット	製作出資収入 劇場商品・パンフレット

※下線は主な収入貢献項目です

興行収入は2024年9月末時点

この表は、映画事業における主要な作品の収入・利益が、映画事業のどのセグメントに計上され、業績に貢献したかを示しております。

セグメント別業績【映画事業】



(単位:百万円)

業績分析 (増減要因)

- 映画営業事業では、第1四半期から続映の「名探偵コナン 100万ドルの五稜星(みちしるべ)」(興行収入157.2億円)をはじめ、シリーズ最高成績となった「キングダム 大將軍の帰還」(同78.5億円)や「ラストマイル」(同48.8億円)、「僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ユアネクスト」(同34.6億円)等に加え、東宝東和㈱配給「怪盗グルーのミニオン超変身」(同44.8億円)もヒット。「ゴジラ-1.0」の国内外における配信権収入による貢献もあり、増収増益。
(興行収入は2024年9月末時点)
- 映画興行事業では、上記の東宝グループ配給作品や「インサイド・ヘッド2」等のヒットはあったものの、豊富なヒット作があった前年同期に及ばず、減収減益。
- 映像事業では、アニメ製作事業において、「僕のヒーローアカデミア」「ハイキュー!!」「呪術廻戦」「怪獣8号」「SPY×FAMILY」「葬送のフリーレン」等、TOHO animation作品の動画配信や商品化権等の各種配分金収入が業績に貢献。パッケージ事業では、「ゴジラ-1.0」の販売が好調。出版・商品事業では、「劇場版ハイキュー!! ゴミ捨て場の決戦」「僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ユアネクスト」のパンフレットやキャラクターグッズの販売が好調。映像事業全体として、大幅な増収増益となり全体の業績を牽引。

TOHO

8

次に、セグメント別の分析となります。

まず、映画事業における映画営業事業においては、前四半期からの続映作品で興行収入 150 億円を超えて新記録となった、「名探偵コナン 100万ドルの五稜星」のほか、夏興行の「キングダム 大將軍の帰還」「僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ユアネクスト」に加え、8月23日に公開した「ラストマイル」の大ヒットも貢献し、大幅な増収・増益となりました。また、「ゴジラ-1.0」の配信権収入について、国内向けに加えて新たに海外向けも計上し、第2四半期の業績を押し上げました。

映画興行事業においては、当社配給作品の高稼働に加えて、「インサイド・ヘッド2」などのヒットがあり健闘しましたが、「君たちはどう生きるか」などの豊富なヒット作があった前期には及ばず、減収・減益となりました。

映像事業においては、「僕のヒーローアカデミア」「ハイキュー!!」「呪術廻戦」「怪獣8号」などの TOHO animation 作品が劇場公開、動画配信、商品化権、パッケージ・グッズ販売などで多面的に稼働し、大幅な増収・増益となり、全体の業績をけん引いたしました。

当第2四半期の主要稼働作品状況

東宝(株)配給作品(興行収入10億円以上)

作品名	公開日	興行収入
キングダム 大將軍の帰還	7月12日	78.5
ラストマイル	8月23日	48.8
僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ユアネクスト	8月2日	34.6
映画クレヨンしんちゃん オラたちの恐竜日記	8月9日	25.4
ディア・ファミリー	6月14日	14.4
もしも徳川家康が総理大臣になったら	7月26日	11.7
<small>(前期からの続映作品)</small>		
劇場版ハイキュー!! ゴミ捨て場の決戦	2月16日	115.5
名探偵コナン 100万ドルの五稜星(みちしるべ)	4月12日	157.2

東宝東和(株)配給作品(興行収入10億円以上)

作品名	公開日	興行収入
怪盗グルーのミニオン超変身	7月19日	44.8

(2024年9月末日現在 単位:億円)

これは、当四半期の当社グループ配給作品のうち、興行収入 10 億円以上を記録した作品のリストとなります。

邦画では 6 作品、続映作品が 2 作品、東宝東和配給の洋画作品が 1 作品となっています。

映画営業事業・映画興行事業の推移

映画営業事業 興行収入推移

(単位:百万円)

	2024年2月期	2025年2月期	前年同期比
3月	6,547	12,948	197.8%
4月	11,388	15,354	134.8%
5月	8,767	8,149	92.9%
第1四半期	26,703	36,452	136.5%
6月	3,182	3,871	121.7%
7月	6,867	6,920	100.8%
8月	9,148	10,687	116.8%
第2四半期	19,197	21,479	111.9%
上期計	45,901	57,931	126.2%
9月	5,070	6,538	129.0%

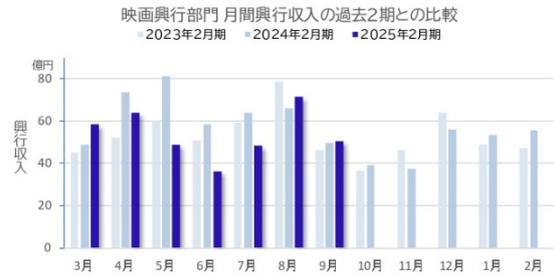
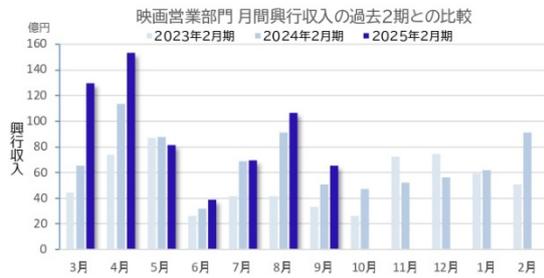
※東宝映画営業部が配給した作品の興行収入

映画興行事業 興行収入推移

(単位:百万円)

	2024年2月期	2025年2月期	前年同期比
3月	4,896	5,833	119.1%
4月	7,374	6,380	86.5%
5月	8,133	4,862	59.8%
第1四半期	20,404	17,077	83.7%
6月	5,864	3,600	61.4%
7月	6,395	4,862	76.0%
8月	6,624	7,139	107.8%
第2四半期	18,884	15,601	82.6%
上期計	39,289	32,678	83.2%
9月	4,952	5,070	102.4%

※全国のTOHOシネマス等で上映されたすべての作品の興行収入(東宝配給作品を含む)



当期の映画営業、映画興行における月別の興行収入の推移は、ご覧のとおりです。

2025年2月期 第2四半期(中間期)アニメ事業 ソース別営業収入及び国内外構成比

◆本表の対象範囲は、TOHO animationレーベル及びこれに準ずる作品です。

	2024年2月期 3月～8月	2025年2月期 3月～8月	前年同期差	増減率	主な増減要因
配信	5,392	10,919	5,527	102.5%	・(+)'僕のヒーローアカデミア'が全体を牽引 ・(+)'呪術廻戦'/'ハイキュー!!'、新作の'怪獣8号'、 '薬屋のひとりごと'などが好調
キャラクターライセンス	3,432	4,881	1,449	42.2%	・(+)'ハイキュー!!'/'呪術廻戦'/'僕のヒーローアカデミア'などが堅調
商品物販	1,434	4,980	3,546	247.3%	・(+)'ハイキュー!!'/'呪術廻戦'などのキャラクターグッズが伸長
パッケージ	875	1,789	914	104.4%	・(+)'葬送のフリーレン'/'ウマ娘 プリティーダービー'/'呪術廻戦'、 '薬屋のひとりごと'などが好調
劇場公開	2,082	6,546	4,464	214.3%	・(+)'劇場版 ハイキュー!! ゴミ捨て場の決戦'、 '僕のヒーローアカデミア THE MOVIE ユアネクスト'が大ヒット
配分金 その他	866	1,558	691	79.8%	・(+)'呪術廻戦'のゲーム化権や'呪術廻戦'/'怪獣8号'、 'SPY×FAMILY'などの配分金が貢献
合計	14,084	30,676	16,592	117.8%	

	2024年2月期 3月～8月	2025年2月期 3月～8月	前年同期差	増減率	構成比
国内	9,041	23,290	14,249	157.6%	75.9%
海外	5,042	7,385	2,343	46.5%	24.1%

※当資料は、アニメ事業に関する開示情報の充実性の観点から自主的に作成したものであり、他の決算資料における数値とは整合しない場合があります。

(単位:百万円)

次の表は、TOHO animation 作品のソース別の営業収入の前期対比となります。

ご覧のとおり、いずれの利用形態においても大幅な増収となりました。

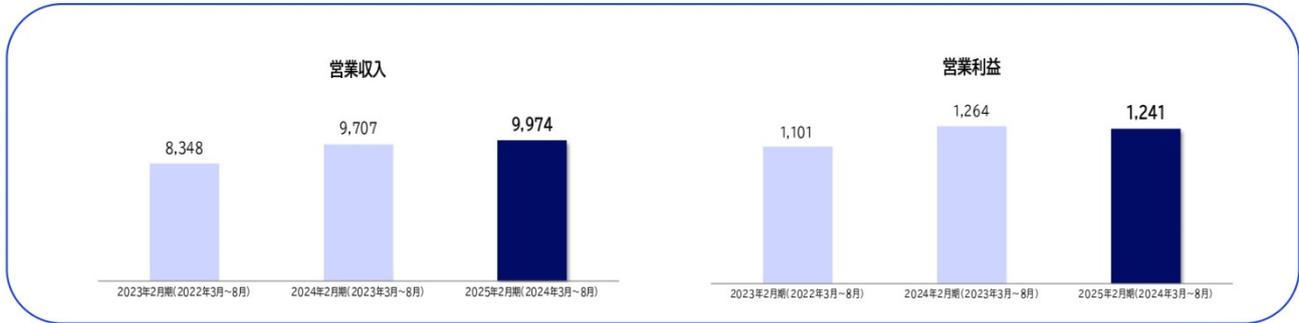
作品で言えば、劇場版が大ヒットし、グッズ販売も大変好調だった「ハイキュー!!」をはじめとして、テレビシリーズの第7期の放映や、第4作の劇場版の公開があった「僕のヒーローアカデミア」、その他、「呪術廻戦」や「怪獣8号」などのタイトルが好調に稼働しました。

国内と海外別に見ますと、今期は劇場公開があったため国内の伸びが大きく見えますが、海外からの収入も着実に増えております。

10月からは、TOHO animation スタジオ制作の「ぶにるはかわいいスライム」や、「アオのハコ」、今回 M&A でグループインしたサイエンス SARU 制作の「ダンダダン」などの、新たなテレビシリーズが始まりました。

また、TOHO Games が手がけるスマホゲーム、「呪術廻戦 ファントムパレード (ファンパレ)」の海外展開を年内に開始する予定であり、下期においても、アニメ事業全体でさらなる伸長を目指してまいります。

セグメント別業績【演劇事業】



業績分析 (増減要因)

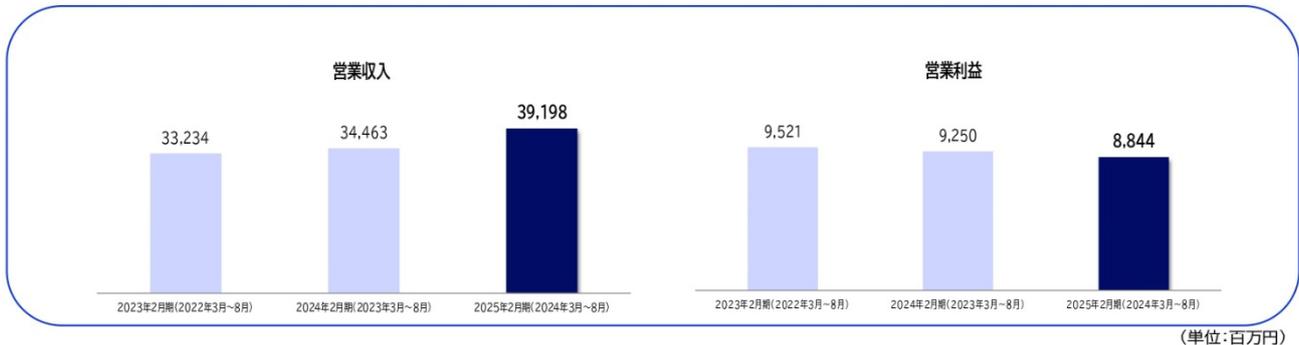
- 帝国劇場では、2025年2月の休館に向けた「帝国劇場 クロージングラインナップ」として、「ムーラン・ルージュ！ザ・ミュージカル」(6～8月公演)、「モーツァルト！」(8月公演)を上演し、全席完売。シアタークリエでは、「ナビレラ -それでも蝶は舞う-」(5～6月公演)、「ライムライト」(8月公演)、「VOICARION XVIII ～Mr.Prisoner～」(8月公演)等を上演し、盛況。「舞台『千と千尋の神隠し』」はロンドン・コロシウムでの4ヶ月間にわたったロングラン公演も大盛況。
- 東宝芸能(株)では、長澤まさみ、浜辺美波、上白石萌音、上白石萌歌ら所属俳優がCM出演等で好調に推移。
- 演劇事業全体としては、帝国劇場を中心に高い水準で推移し、地方公演において「舞台『千と千尋の神隠し』」や「Endless SHOCK (Endless SHOCK/ Endless SHOCK Eternal)」等の高稼働により増収となったものの、公演経費の増加が影響し減益。

続きまして、演劇事業についてご説明いたします。

2025年2月に休館予定の帝国劇場では、現在クロージングラインナップを展開しており、これまで上演した「ムーラン・ルージュ！ザ・ミュージカル」「モーツァルト！」は、おかげさまで全席完売となりました。シアタークリエの「ナビレラ -それでも蝶は舞う-」などの上演も、好調に推移しました。

また、特筆すべきは、舞台「千と千尋の神隠し」の4カ月にわたるロンドン・コロシウム劇場での公演です。これは当社にとっても大きなチャレンジでありましたが、延べ30万人を動員して大盛況のうちに終了し、日本演劇界初めての快挙というべき成果を残すことができました。

セグメント別業績【不動産事業】



業績分析 (増減要因)

- 不動産賃貸事業では、保有する全国の賃貸物件が堅調に稼働。前期より子会社となった㈱東京楽天地の業績が貢献したことに加え、昨年2月竣工の「東宝日比谷プロムナードビル」をはじめとした新規物件が貢献し増収となったものの、大規模修繕費用等の一時的な費用増があったため減益。
- 道路事業では、公共投資が堅調に推移するなか、技術提案等を通じた積極的な営業活動により新規受注や既存工事の追加受注に努めたことに加え、自然災害に対する緊急対応を行ったことにより増収。採算性の高い工種が減少したことや、労務費・資機材価格の上昇等が影響し、減益。
- 不動産保守・管理事業では、東宝ビル管理㈱・東宝ファシリティーズ㈱において、新規受注や請負金額の改定、経費削減に努めたこと等により、増収増益。

次に、不動産事業です。

不動産事業は、保有する全国の賃貸物件が順調に稼働したほか、道路事業も堅調で、東宝グループの業績をしっかりと支えています。

不動産賃貸事業においては、前期より子会社となった東京楽天地の業績が貢献したことに加え、昨年2月竣工の「東宝日比谷プロムナードビル」が増収に寄与したものの、大規模修繕などに伴う費用の増加があったため、減益となりました。

また、道路事業や保守・管理事業も堅調に推移しておりますが、不動産事業全体としては、建設費や水道光熱費の高騰といった厳しい状況が続いており、引き続き情勢を注視しながら、柔軟かつ機動的な対応で賃料収入の維持、拡大を図ってまいります。

業績予想修正

■ 2025年2月期連結業績予想(2024年3月1日～2025年2月28日)

	営業収入	営業利益	経常利益	親会社株主に帰属する 当期純利益	1株当たり 当期純利益
	百万円	百万円	百万円	百万円	円 銭
前回発表予想(A) (2024年4月15日発表)	280,000	55,000	57,000	39,000	223.50
今回修正予想(B)	297,000	62,000	60,000	40,000	234.26
増減額(B-A)	17,000	7,000	3,000	1,000	—
前回発表増減率	6.1%	12.7%	5.3%	2.6%	—
(ご参考) 2024年2月期実績	283,347	59,251	63,024	45,283	259.51

主力の映画事業において「変な家」「名探偵コナン 100万ドルの五稜星(みちしるべ)」「キングダム 大將軍の帰還」「ラストマイル」等の大ヒットに加え、前連結会計年度からの続映となる「劇場版ハイキュー!! ゴミ捨て場の決戦」が興行収入115億円超と想定を超えるヒットとなりました。また世界的ヒットとなった「ゴジラ-1.0」の配信プラットフォームへの販売が国内・海外とも大きく伸びました。TOHO animationでは「ハイキュー!!」「呪術廻戦」「僕のヒーローアカデミア」「怪獣8号」での国内外の配信、商品化権、グッズ販売等の各種事業展開が好調に推移し業績を牽引いたしました。こうした状況に加え、下半期の事業見通しや直近の業績を踏まえた結果、営業収入、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益が前回発表の予想を上回る見込みとなりましたため、連結業績予想を見直しました。

なお、期末の配当予想につきましては当社の株主還元の方針(配当性向30%以上)に基づき、引き続き検討してまいります。

ここまでが、業績の概要とポイントでございます。まとめますと、第1四半期に続いて当社配給作品のヒットが続いた映画営業事業と、TOHO animationの各作品が伸ばした映像事業の好業績が全体を大きくけん引し、過去最高であった前期をさらに大きく超える好決算になったと認識しています。最後に、上期業績が当初予想を上回って推移したため、通期の業績予想を見直し、上方修正をいたします。

通期で、営業収入が2,970億円、期初予想は2,800億円。営業利益は620億円、期初予想は550億円。経常利益は600億円、期初予想は570億円。当期純利益は400億円、期初予想は390億円。

営業収入と営業利益で、過去最高を見込んでおります。

以上、決算につきましてご説明いたしました。

1. M&Aについて

- 本日開示いたしました、「米GKIDSの子会社化の件」
についてご説明いたします。



続きまして、投資家の皆様から事前にいただいた質問や、関心が高いと思われるポイントを整理いたしました。

まずはじめに、昨日の取締役会で決議し、今朝発表しました、北米を中心にアニメーションの製作と配給を手掛ける GKIDS, INC. (以下、GKIDS) の子会社化について、少しお話をさせていただければと思います。

アメリカで映画ビジネスを営んでいる方、あるいは世界中でアニメーションビジネスにかかわっている方の中で、GKIDS という会社を知らないという方はいらっしゃるかと私は考えております。北米を中心に、アニメーションビジネスにおけるトップランナーと称される、素晴らしい会社です。

私見ではありますが、私はアニメーションとアニメには、少し違いがあると思っています。アニメーションは、古くから動画を用いて、ディズニーやその他の会社が手がけているジャンルのことを指していますが、日本から発信される作品に限り、アニメと称されるようにここ最近ではなっていると感じています。そのアニメーション、アニメの両方を扱う稀有な会社、それが GKIDS です。

日本だけではなく、世界中の非常に高い品質のアニメーションを扱い、アカデミー長編アニメ映画賞の候補に多数の作品を送り出しています。今年、スタジオジブリの「君たちはどう生きるか」の北米配給を担当して、大成功に導きました。そして、同作品がアカデミー長編アニメ映画賞を受賞するにあたり、大きな貢献をしています。

Eric Beckman 氏と Dave Jesteadt 氏という 2 人の才能にあふれた素晴らしい経営チーム、彼らは GKIDS 設立当初からこの会社に携わって、成長を遂げてきました。われわれは、彼らに 100% の全幅の信頼を置いております。そう

いったこともあり、現経営陣にマネジメントを任せ、東宝は、われわれが持つアセット、リソースを使って、GKIDS の成長をサポートしていきたいと考えています。そして同時に、東宝が成長領域と位置づけているアニメ、IP、そして海外ビジネスの成長とのシナジーについて、彼らとともに取り組んでいきたいと考えています。

具体的には、Toho International が、昨年度の「ゴジラ-1.0」の配給から取り組んでいる、アメリカにおける劇場配給事業を、彼らといかに補完し合っていくのかを検討したいと考えております。

われわれが、「ゴジラ-1.0」を北米で配給を自社配給していこうと決断したときには、本当に大きなチャレンジでしたし、さまざまなリスク、課題がありましたが、それを乗り越えることで、今までとはちがった景色、今までとはちがった目標が出てきたように感じています。

では、Toho International、あるいはアメリカにおける自社配給事業をどうやって強化していくのかと考えているさなか、幸運にも GKIDS からの話がわれわれのところへ運ばれてきました。その後、Toho International をこのまま成長させていくのか、あるいは GKIDS と組んで素早く大きなビジネス展開をしていくほうがよいのか。さまざまなメンバーで熟考を重ね、最終的に、この GKIDS という会社を東宝グループの中に入れてもらおうと、迎え入れようという判断をいたしました。

これは、われわれの北米、そして海外事業において、大きな選択肢を与えてくれていると思っています。本日の朝に発表した後、私のところにも数多くの海外の仕事仲間から、「素晴らしい M&A だと思う」「これからの成長を期待しているよ」という声が、本当にたくさん届いております。

そして私どもは、この GKIDS が東宝作品を扱う会社と認識されるのではなく、数々の素晴らしい日本を中心としたアニメ作品が海外で展開するために、GKIDS という会社を選ばれるように、それもこれまで以上に皆さんに信頼していただけるように、われわれはサポートしていかなければならないと考えています。

ぜひ、日本のアニメ関係者の方たちが、海外で皆様の作品が展開される際に、GKIDS を、あるいは東宝を信頼していただき、架け橋のような存在になれることを、われわれの目標にしたいと思っています。以上、GKIDS のことについて説明をさせていただきました。

1. M&Aについて

- (5/23) (株)サイエンスSARUの子会社化
- (8/23) (株)バンダイナムコホールディングスとの資本業務提携
- (10/15) (株)コミックス・ウェブ・フィルムの一部株式取得
- (10/16AM5:00) 米GKIDSの子会社化



続きまして、M&A のことについてもお話をさせていただきます。

5 月に、サイエンス SARU の子会社化を発表しております。

サイエンス SARU は、国内外で非常に高い評価の作品を生み出すことができるアニメスタジオです。こういった有力なスタジオが東宝グループの中に入り、ハイクオリティなアニメコンテンツの制作能力が高まることは、われわれのアニメ事業にとって大きな強みになると思っています。

8 月には、株式会社バンダイナムコホールディングスとの資本業務提携を発表しましたが、両社でオリジナル IP の企画開発、そしてその IP を国内外で活用することを目指しております。バンダイナムコグループの持つ幅広い IP 展開に関するノウハウ、そしてわれわれが持つ IP の創出能力、あるいは映像作品の製作配給能力、こういったことをお互いに共有しながら、IP を世界になんとかして届けていきたいと。そのために、さまざまな施策に取り組んでいく所存でございます。

そして昨日、株式会社コミックス・ウェブ・フィルムの株式一部取得を発表いたしました。いうまでもなく、コミックス・ウェブ・フィルムは、新海誠監督の作品を長きにわたり制作されてきたアニメスタジオであります。

社会現象を巻き起こした「君の名は。」、その次の「天気の子」、そして最近公開された「すずめの戸締まり」、この 3 本は、日本国内での興行収入がどれも 100 億円を超えるという大ヒットメーカーであり、そして最近の「すずめの戸締まり」に至っては、国内の収入よりも海外の売上のほうがはるかに大きいという、まさにグローバルに認知されているアニメ作品。こういった作品を手がけているのが、コミックス・ウェブ・フィルムです。

われわれは長きにわたり、こちらの会社と製作・配給でパートナーシップを組んできましたが、今回の取り組みによって、連携がさらに強固なものとなって、われわれと一緒にさらなる高みを目指していけるように、そのようなかたちでパートナーシップを強めていきたいと思っております。

そして GKIDS のことについては、先ほど説明したとおりです。これらいくつかの M&A に関しては、さまざまな角度から検討をし、われわれが不足していると思われる部分、あるいは強化したいと思われる部分を一つ一つ埋め合わせていったと認識しております。その中で、本日発表した GKIDS という、アメリカでアニメビジネスを拡大できるパートナーが、われわれの仲間に入ってくれたことを、大変嬉しく思っています。

これらの M&A は、どれも「中期経営計画 2025（以下、中計 2025）」「TOHO VISION 2032」に沿ったものと捉えています。すなわち、アニメ、IP、海外といった、東宝にとって重要な成長領域を意識した、将来に向けての投資です。

すでに発表している FIFTH SEASON というアメリカの配信向けの制作会社、あるいはタイの IGLOO STUDIO というアニメーションの制作スタジオといったものも含めると、この 2 年間で多角的に、そして大きな M&A を手がけることができたと感じております。

なぜこのようなことができたかということ時々考えるのですが、これは本当に手前味噌かもしれませんが、これまで東宝の先輩の経営陣の方々が、安定的な経営基盤を築いてくださったからこそだと思っています。映画業界が非常に厳しい時代、その中でもがきながら、苦しみながら、東宝を成長させ、そして安定的な会社経営をされ、それを引き継いだ現在会長の島谷社長時代に、アニメと海外を攻めるんだと。そういう判断があったからこそ、われわれは今、こういった取り組みができているんだと感謝しております。

「中計 2025」を出すまでの東宝は、いわば土壌を耕す時期にあったと捉えています。「中計 2025」からは、そしてあるいはビジョンを打ち出してからは、耕した土壌に種をまく時期に移行しています。そして将来、その種から生えてきた芽、そこから出てくる成長した後の果実、それらを刈り取ることができるのはわれわれだけではなく、もしかしたら将来の東宝のメンバーかもしれません。ただ将来、立派な、そしてリッチな果実を刈り取ることができるように、われわれとしてもしっかりと育てていきたい事業ばかりです。

M&A に積極的に取り組むイメージが徐々に浸透してきていることからかもしれませんが、国内外の方々から打診されるケースも非常に増えてきました。今後も、東宝の成長にとって必要だという機会があれば、焦らず、しかし積極的に検討していきたいと思っております。

以上、M&A についてお話をさせていただきました。

2. アニメビジネス、海外展開の展望について

- ▶ 成長ドライバーとしてのアニメと海外展開の現在地
- ▶ 今後の成長イメージ



続きまして、アニメビジネス、海外展開の展望についてです。いうまでもなく、アニメ市場は国内だけではなく、海外も飛躍的に増えています。東宝にとって、攻めるべき成長市場であることは間違いありませんが、企画、作品の獲得競争は激化しています。

われわれは、国内外のアニメスタジオをグループに迎え入れ、最重要地域である北米のアニメ配給会社も M&A しましたが、これは東宝の総合力を高めるための計画であり、それを遂行したことになります。

私は意識的に、海外市場を今年になってから視察していますが、欧米、東南アジアにおけるアニメや IP に対する盛り上がりは、非常に増していると体感しています。そういったこともあり、2023 年 10 月に TOHO Global を設立しました。東宝の 100% 子会社であり、すでにある北米中心の Toho International の親会社となります。

現在、アジア地域における拠点をシンガポールに構築中です。また、今後は EMEA (Europe, the Middle East, Africa の頭文字をとった略語) などでの事業展開も目指していきます。こういったネットワークを構築していく理由は、アニメやゴジラの作品を販売するということだけではなく、マーチャンビジネスやゲームビジネスも多角的にやっていこうという目標があるからです。つまり、IP 展開のために必要なインフラを整えていこうと。そのために、われわれは投資をし、その投資が将来成長につながると考えています。

視察している地域の中でも、例えばインドなど、これから必ず成長すると思われる、しかし日本のアニメ、IP の存在感がまだまだ小さい地域もあります。そういった地域は、われわれにとっても、いわゆる伸びしろなのではないかと思います。国内で

強いアニメ企画を獲得するための製作体制を整えつつ、それを国内外、特に海外でマネタイズしていく。そういった方針を今後も継続し、事業を強化していきたいと思っています。

それに加えて、海外では FIFTH SEASON という会社に投資しております。実写の配信シリーズ、そういったものを世界展開する上で、FIFTH SEASON を起点としていければと思います。

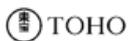
また、先ほども申しましたが、演劇の「千と千尋の神隠し」。日本人のキャスト、クルーのみが日本語で 4 カ月間にわたり行った興行が、ほぼすべての回で満席となりました。大成功との感触を得ています。その大成功がさまざまうわさとなり、われわれのところにも、次はわれわれの場所に、私たちのところに来てほしいという声がたくさん届いております。

演劇部を中心として、次は「千と千尋の神隠し」をどこに旅させるのか、あるいはちがう作品をどのようなかたちで海外に持っていくのか。そういったことにも取り組み始めています。

海外における競争、アニメにおける競争は激しくなる一方ですが、東宝の持つ優位性である総合力をさらに高めていながら、取り組んでいきたいと思っています。

3. 2025年2月期について

▶ 通期連結業績予想の上方修正



続きまして、最後に2025年2月期の業績についてのご説明です。前述のとおり、上方修正をいたしました。

映像ビジネス、エンタテインメントビジネスの運命、宿命のようなものかもしれませんが、今後の作品のポラティリティであったり、GKIDSののれん償却が100%、正確な数字が把握できているわけではない。そういったさまざまな要素はございますが、620億円という高いレベルの営業利益に上方修正いたしました。

期首に550億円の営業利益をご提示した際には、これまで多くの投資家の方々からご指摘をいただいた、東宝の予想はちょっと保守的過ぎるんじゃないかということ、われわれの中でも議論してお出したわけですが、それをはるかに超えるかたちで上方修正できる。これは正直、われわれにとっても大きな驚きであります。

改めて東宝の事業について説明しますが、不動産は堅調に推移しています。ただ、諸経費の値上がりその他が利益の制約になっているのが現状です。演劇は、帝劇公演の満員御礼が続いていますし、それ以外の公演でも絶好調です。しかし制作費が高騰しているために、利益の上積みが難しいところです。

映画興行は、昨年比較ではやや減少しています。しかし、映画事業の営業部門と企画部門が絶好調です。例えば、自社企画の「変な家」は、おそらく業界内の誰もが予想しなかった興収50億円という特大ヒット。その作品の制作費のほとんどを東宝が捻出している、出していることもあり、利益率が非常に高く、営業利益の貢献も絶大です。

そしてアニメが少し前に比べると、国内外で大きな数字を上げ始めています。また今年度は、「ゴジラ-1.0」の国内・国外での配信業者へのセールス収入が、非常に大きなかたちとして上がってきました。さらにゴジラは100%東宝のIPですから、いくばくかの手数料を除けば、収入はほぼほぼ利益ということで、われわれのビジネスに貢献してくれました。

上期は約400億円の営業利益、最高益だった昨年の上期が約300億円でしたから、それを大きく上回る数字となっています。

下期の予想を、われわれとしてもしっかりとしているつもりです。昨年度は、「ゴジラ-1.0」や「劇場版 SPY×FAMILY CODE: White」といった大型作品がございました。その前期の下期の営業利益は約290億円。われわれは下期220億円の見通しを営業利益でしていますが、これは歴代でもトップクラス。自信を持って、この220億円を打ち出しております。

洋画に関しては、まだまだ復調しているとはいえませんし、映画興行界は少し頭打ちしているような印象もありますが、下期も確実に対処して、良い期としてフィナーレを迎えたいと思っております。

2025年2月期の年間配当予想は、「中計2025」で掲げている配当性向30%以上という方針にのっとり、70円とさせていただきます。今後、さらなる業績の修正などがあれば、配当についても見直す可能性があります。

東宝はこれまで、国内の映画興行と連動するビジネスモデルをわれわれの主業としておりましたが、新たな軸としてアニメ、IP、海外でのビジネスが育っております。かつての3本柱（映画、演劇、不動産）の優位性を磨きつつ、新しい軸を太くして成長していくことが、これからのわれわれにとっての大きな目標になってくるかと思えます。

成長投資もありがたいことに、今のところ想定どおりに進んでおり、大型M&Aにも取り組んでおります。ここでとどまらずに、次なる成長に向けて焦らず、しかし積極的に、必要な投資や社内・組織の改革、改善を進めたいと思っております。加えますと、次の中計に向けての議論も社内でも加速化させております。

以上、2025年2月期についてのお話をさせていただきました。ありがとうございます。

以上